

楽しく学び、遊んでいた、大好きな大川小学校でたくさんの子供が犠牲になりました。

あの日から私たちはずっと考えています。

子どもたちの小さな命が問いかけているものはなんだろうと。

小さな命の問いかける意味は、深く、重い。それに向き合いたいと思います。

何をいつまで、と思うかもしれません。その通りです。時間はどんどん過ぎていくのですから。

警報が鳴り響く寒い校庭で、子どもたちは危険を察し、逃げたがっていて、

それでも先生を信じて、指示をじっと待っていました。

その事実から目を背けてはいけなと思います。

あの日の校庭に目を凝らすことで、何か大切なことが見えてくるはずですよ。

悲しみは消えることはありません。でも、この悲しみはあの子たちの存在そのものです。

忘れる必要も、乗り越える必要もなく、いつもそばに感じていていいのだと思います。

あの日の校庭もそうでした。多くの方が、このままではいけないと感じています。

誰かが「そっちに行くな」と声をあげなければ。津波が来てからでは遅いのです。

そう考え、このタイミングで会を作りました。趣旨をご理解いただければと思います。

あなたの大好きな学校の  
教室 廊下 校庭 体育館  
風にそよいでた桜の花びら  
空に向かって「いだばらんこ  
絵本といっしょに  
バスを待っていた図書室  
あの笑顔を忘れない  
あの歌を忘れない  
あの思い出を忘れない  
あの悲しみも忘れない  
「行ってきます」  
あの朝の  
いつもと同じ風景を  
忘れない  
どろだらけの教科書を  
洗って 干して



## セウォル号事故遺族の皆様へ

ニュースで、深い悲しみに沈んでいる皆様の様子を知りました。あまりに突然の悲しみと理不尽さに、自ら命を絶つ遺族もおられるという報道に、いたたまれず手紙を書いています。

私の国では、3年前の大津波で、たくさんの命が、木の葉のように流されて消えました。病気とも、戦争とも違います。何の前触れもない死です。あの年は、毎週のように知人の葬儀があり、泣いて、落ち込んで、悔しがり、気がおかしくなりそうでした。今も、あの人はもういないんだと、ふと思い出し、何とも言えず胸が苦しくなります。何の疑問もなく続くと思っていた日常があの日から突然、目の前から消えました。

私の娘は学校で亡くなりました。石巻市立大川小学校の6年生、あと一週間で卒業式でした。学校の前の道路に、泥だらけになった小さな遺体が、次々に並べられていました。とても受け入れることなどできませんでした。今でもそうです。家にいると、娘の「ただいま」が聞こえそうな気がしてなりません。

我が子の名前を呼びながら、海に向かって泣き崩れる方々の映像を見て、とても他人事とは思えませんでした。こんな形で、家族を残して遠くに旅立たなければならぬなんて…。怖かったです。冷たかったでしょう、どんなに生きたかったことでしょう。

セウォル号では、危機に対する備えが不十分であったと聞きます。人の命を預かるはずの組織が、命を最優先にしていなかったということです。「命」よりも他のものを優先し、今日もどうせ大丈夫、少しぐらいならいいだろうという積み重ねが、船長をはじめとした乗組員の行動にも表れています。避難マニュアルも、救命ボートも、命を守るためのものではありませんでした。

大川小学校の災害への備えや避難マニュアルも実体のない、杜撰なものであったことが分かっています。そして、保護者や子どもたちが避難を訴えていたにもかかわらず、50分間校庭で動くことはありませんでした。

私は教員です。学校管理下で子どもを亡くした私の職場は、学校です。子どもたちは逃げたくても先生の指示を待っていました。先生の一言で、全員が助かっていたでしょう。体験したことのない揺れの後、大津波警報が鳴り響いていたあの状況で「逃げろ!」と、なぜ強く言えなかったのか、私はいつも自問しています。

セウォル号の事故で、未だに大川小学校での事故が教訓にもなっていないことが分かりました。3年以上も前の事故を通して、命を預かることの意味が見直されていれば、今回のような事故は防げたかもしれないとさえ思います。船でも列車でも、災害でも、当たり前前のことをしていれば、守られるはずの命が失われる事故・事件は決してあってはなりません。真に大切なことを、最優先に見つめ、語れる社会にしていかなければと強く思います。

命とはなんとほかないものなのでしょう。地球がちよつと身震いしただけで、破れてしまう薄い紙のようです。一方で、どんな大津波でも流されないものは、心だということを知りました。どんな状況にあっても人は希望を見つけ出せることを知りました。

瓦礫だらけだった町が少しずつ息を吹き返しています。心が折れなければ、希望を持ち続けられれば、やがて光は見えてきます。茎が光を目指して伸びていくように。たとえゆつくりでも、たとえ一人でも、それに向かって進めばいいのだと思います。

あの子たちの犠牲が無駄になるかどうか、それが問われているのは生きている私たちです。小さな命たちを未来のために意味のあるものにしたい、それが、三年かかってようやく見つけた私にとってのかすかな光です。

他の国の見知らぬ者が、勝手なことを述べて、嫌な想いをされたのであれば申し訳ありません。関係ないだろう、と言われれば、たしかにそうです。でも、少なくとも私は、こうして書かずにはいられませんでした。皆さんとは、何らかの形で手を携えていけたらとも思っています。

もうすぐ娘の誕生日です。誕生日、お正月、クリスマス…、楽しい思い出の日が今年も巡ってきます。その度、胸を締め付けるこの悲しみは、娘の存在そのものです。だから、無理して乗り越えなくてもいいんだと、最近ようやく気づきました。この悲しみとともに私は残りの人生を歩んでいきたいと思っています。

時折、夢に出てくる娘はいつも笑顔です。  
どうぞご自愛ください。

小さな命の意味を考える会  
佐藤 敏郎

6月に韓国のハンギョレ新聞に掲載されたものです。  
韓国だけではなく、欧米の方々も強い関心をもってしています。

大川小事故について 主な経緯

- 2011.3.11 東日本大震災 児童74名 教職員10名犠牲
- 2011.3.15 A先生からメール(電話でも話したと当時のメディアの取材には答えている～履歴削除)
- 2011.3.16 校長先生市教委へ※
- 2011.3.17 校長先生初めて現場へ
- 2011.3.25 校長先生、A先生市教委へ 倒木で避難できず
- 2011.3.29 登校式(遺族は報道で知る)
- 2011.4.9 説明会① 非公開、議事録なし  
A先生出席「木がバキバキ倒れた」「倒木にはさまれ動けず、波をかぶった」
- 2011.5 聞き取り調査
- 2011.6.4 説明会② 1時間で打ち切り 「倒木があったように見えた」に訂正  
市長「自然災害の宿命」と発言 非公開、議事録なし～報道には「遺族は納得」「説明会はこれで最後」
- 2011.8 調査メモ廃棄が明るみに
- 2012.1.22 説明会③ 報道に公開 6.3に来たというA先生の手紙(FAX)公開
- 2012.3.18 説明会④ 話し合いの継続
- 2012.3.31 市教委担当2人転出
- 2012.6 ※が明るみに～「引き渡し中に津波」と記載
- 2012.6 市教委、突然第三者による検証委員会を発表
- 2012.6 遺族記者会見
- 2012.7.8 説明会⑤
- 2012.8 文科省に説明
- 2012.8.19 文科大臣献花
- 2012.8.21 市教委、初めての現場検証
- 2012.8.26 説明会⑥
- 2012.9.5 文科省大川小の検証を表明
- 2012.9.11 文科省へ
- 2012.10.28 説明会⑦ 遺族有志の考察発表
- 2012.10～11 検証委員会準備 遺族らの意見反映されず
- 2013.2.7 検証委員会①
- 2013.3.28 遺族意見陳述
- 2013.7.20 中間とりまとめ(ここまで51分間の議論ほとんどなし)
- 2013.11.3 有識者による公開ヒヤリング(一般論に終始)
- 2013.11.10まで パブリックコメント募集  
全国から68の貴重な意見～なんのため？ただのポーズ？
- 2013.11.12 遺族と情報交換  
遺族おこって途中退席 → 委員長と直接対話するきっかけに  
～検証委員会の状況を委員長も危惧
- 2013.11.29 意見書提出  
小さな命の意味を考える会設立
- 2013.11.30 検証委員会で遺族と意見交換
- 2014.1.26 他 最終報告案に質問、疑問100以上
- 2014.2.23 検証委員会最終報告 出席委員4名 他は欠席
- 2014.3.1 石巻市に報告書提出
- 2014.3.10 告訴
- 2014.3.23 市教委説明会(何も説明せず、質問にもほとんど答えず)
- 2014.4.1 市教委担当交代 心のケア事業スタート

2012.10.28遺族有志の考察発表  
検証すべき点  
1 なぜ意思決定が遅れたのか  
2 なぜあのような避難ルートをとったのか

2013.2.23検証委員会報告  
事故の原因  
1 意思決定が遅れたため  
2 あのような避難ルートをとったため

山に登れることは全員知っていた。



体育館裏の山 椎茸栽培などが行われていた  
現在は立ち入り禁止で草が茂っている



傾斜9° マラソンコースの脇



☆は3年生の授業で登っていた場所。赤い線は津波の高さ。



2009年夏 かなり高い位置から撮影(校長先生)



2009年夏 雨あがりでも登って撮影



校庭脇の山 3年生の授業 2010.6月撮影



2014.5月撮影  
幅4m 200人以上でも大丈夫  
当時はこんなに草はない

1月26日と2月9日、最終報告案についての意見交換会で、遺族からの質問に対し、検証委員長は「検証委員会の限界」という言葉を再三使用しました。「壁」と言う語もでてきました。

何が限界なのでしょう。  
時間？予算？能力？それとも別の限界でしょうか？それを知りたいものです。

平成24年11月25日、検証委員会の立ち上げにあたって、事務局から重視する点が示されました。  
たとえば以下の点です。

なぜきちんと判断して避難行動がとれなかったのか、それはマニュアルがきちんと定められていなかったからだというのであれば、では、なぜそのマニュアルがきちんとできていなかったのか。こういった「なぜ」を繰り返すことが非常に重要で、それによって背後にある原因を究めていくことができる。

現場にいた個人の判断の誤りなどにとどまらず、それをもたらした背後の要因、それは多くの場合は組織の問題であるが、そういった問題に踏み込まなければきちんとした対策はとれない。

様々な要因が重なり合って大きな事故・災害をもたらす。それらをすべて明らかにすることが検証として必要。

事故調査や検証の目的が責任追及でないからといって、結果として責任が明らかになるからという理由で報告書の筆を鈍らせてはいけな。結果として、真実を明らかにし、分析をすると、どこに責任があるか明らかになってしまう可能性がある。それを恐れて検証の調査の腕、あるいは報告書を執筆する筆を鈍らせてはならない。

「なぜ」を繰り返す  
背後の要因に踏み込む  
要因はすべて明らかにする  
責任の所在が明らかになることを恐れない

その言葉に、ほんの少しでも期待した私たちが甘かったのでしょうか。

「限界」で済ませるくらいなら  
はじめからこんなことを言わないでほしかった。

絶対伝わるはずだと思ってきました。  
だって、学校であんなにたくさんの子どもの命が失われたのですから。  
きっと伝わっていると思います。  
でも、壁は動かなかった。

あの日に発車した列車に、2年後に乗り込んできた検証委員の先生方は  
持てない荷物は窓から放り、あるいは車内に残したまま、  
「最終報告」という駅で降りてゆく、そんな感じがします。

ソチ五輪と同じ日に、検証委員会は閉会するようです。

今回の説明会でも「限界」「不十分」という言葉が繰り返されました。  
不十分な検証結果であったことを、検証委員自らが認めています。

「最終」だというのに、矛盾点や疑問が続出。  
委員長は印刷作業が始まっているというのに、修正を加えることを約束しました。  
(もう印刷を始めているというのも変ですが)

委員の先生方は口々に閉会の挨拶  
「これを一つの区切りとして・・・」  
「これからも別の形で」  
「今回の提言を今後の防災に役立てて」  
そう言うのは簡単ですね。  
中には「不十分で申し訳ありませんが、大変勉強になりました。」  
耳を疑いました。  
多くの委員が欠席しましたが、「体調不良」だそうです。

不十分とされた一例をあげます。  
石巻市教委は、23年6月4日に「(川からと、海から来た波がぶつかり)校庭で渦を巻いていた」という説明をしています。最後の場面を高いところから見ていた人がいるという重要な部分です。

市教委はこの部分の根拠を説明できていません。だから報告書には記載がありません。では「渦を巻いていた」という説明はいったい？

肝心なところなのに、深く踏み込んでいません。市教委が「覚えていない」と言えば「証言が得られない」となります。同様にして、いつのまにか消えている事実や証言が多くあります。

どうして詳しく調べないのですかと聞くと、「遺族と検証委員会の認識の違い」で片付けます。あるいは「そういう事実は明らかにならなくても提言はできる」と開き直ります。  
「可能な限り事実を明らかにする」と言っていたはずなのに、すり替えられた感じがします。  
だとすれば、今回出された提言は事実に基づかない提言です。

「引き渡し中に津波」という報告書の根拠、ファックスを公開しなかった理由、山への避難を訴えた子どもについて説明が二転三転したことも、調査メモ廃棄についても、私たちが疑問に思っていたことについては、新しく分かった事実は何もありません。

「私たちがなりに懸命に事実を集めました」と言うものの、新たな事実は集められなかったとも認めました。

メダルゼロ、名場面ゼロ、誰も思い出さない1年間のパフォーマンスが終わり、ほとんど頁をめくられることのない分厚い報告書がまもなく印刷完了です。